

あちらこちら

文学散歩（第五回）

井本元義

「十四」発見

ランボーに関して、数年毎に何かが発見されファンだけでなく世間を騒がせる。その都度ランバルジャン「ランボー好きな人」の胸は躍る。

二千十六年十一月三十日 パリのクリスシエというオークションで一丁のピストルが落札された。当初の予定価格は日本円で七百万円前後だった。競り値段は瞬く間に上がって結果は五千三百万円で落札された。落札者の国籍はもとより何者かもわからない。電話による入札であった。

六連発、木製の柄、口径七ミリメートル、全体的に小さく男の手のひらくらいのサイズである。スマートな洒落たシンブルな形である。

千八百七十三年、物憂い夏の午後、七月十日、ブリュッセ

ルの下町の安ホテルでヴェルレーヌがランボーを撃つた銃そのものである。見た目ではそれほど殺傷能力があるとは思えない。事件の調査に記録された製造番号が本体のそれと一致したのだ。



ランボーが
ヴェルレーヌに
撃たれたピストル

それを手にする自分を想像するとうつつりとしてしまう。当時は当然警察に保管されていたのだろうが、百四十年の年を経てどんな経過を経ていきなりこの世に出現したのか。どんな人物が発見し、これがその銃だと断定したのか。おいおいその経過も明らかになるだろう。そしていつの日か僕もそれを眼にすることができよう。手にすることはできないにしても。

二年ほど前だったか、僕のフランス語のエレーヌ先生が休暇のバリから帰ってきた最初の授業の時に僕に言った。

「ムッシュー井本、ランボーが外人部隊でジャワにいたこと知っていますか」

見せてくれた新聞には、アメリカのジャーナリストがその

兵舎を訪ねた記事が載っていた。パリでは評判のニュースになつていたので。勿論僕は知つていた。それは千八百七十六年頃です。そう伝えると先生は少しがっかりしていた。ランボーのその頃の手紙にジャワからの一通がある。何故彼は外人部隊に入つてジャワなどに行つたのか。オランダ部隊だ。あまり語られていないけれど、彼に取つては、「そして僕にとつても」それは特に重要な時期だつたのだ。つぎの章でくわしく書くことになる。しかしそのアメリカのジャーナリストも大したやつだと感心せざるを得ない。

一番の発見は七、八年前、プロカント「高級骨董市」で発見された三十代のランボーの写真だろう。場所はアデン。二年ほどの考察の結果、千八百八十年に姿を消したその後のランボーの三枚目の写真と言われた。これはかなりセンセーショナルだった。これも詳しく後で述べることになるだろう。

だがこれも最近、別人だという説も出てきた。僕なりの意見もある。

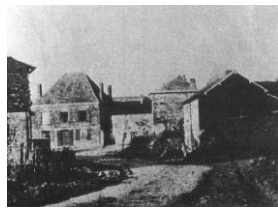
次は何が出て来るか、わくわくするばかりだ。

「十五」地獄の季節の執筆

しばらく手首の治療で入院していたが、彼は傷が癒えるとロツシユ村へ帰つてきた。ロツシユ村は先祖の土地、母親が幼い頃住んでいた田舎である。一家の郷里だ。小作人を遣い農業を営んでいる。夏が終わり一家は総出で出かけ忙しい農

作業に従事する時だつた。

一家は農繁期以外は普段はシャルルビルに住んでいる。今はミュゼランボーになつていて粉ひき工場の前、ムーズ川のほとり、ランボー河畔のアパルトマンである。ここで数々の詩を書いたのは前に述べた。ロツシユ村とは約三十キロ離れている。



「地獄の季節」が書かれた
当時のロツシユ村

僕が最初ミュゼを訪れた時、事務員に今からロツシユ村へ行きたいが、どうやったらいけるか、と聞いたことがある。え、歩いて？ 三十キロはあるよ、と笑われた記憶がある。

不遜な態度のランボーも傷を負い、また刑務所に入つてくる親友のヴェルレーヌを思い当りに落ち込んでロツシユ村へ帰つてきた。最初心配して気を遣つてくれた家族も農作業に忙しく彼を構うことも少なくなつてくる。まったく手伝う気のないランボーには書くことしかなかつた。もともと詩情は噴き上げんばかりである。生々しい体験がさらに強烈な効果を生んでいる。

彼は穀物倉庫の二階に一日中籠って詩を書き続ける。「地獄の季節」だ。いつ眠ったか起きたかわからない。書きながら彼は怒号を飛ばし呻き鳴咽を上げる。悪夢と闘う。足踏みが激しい。熱にうなされ続けた一ヶ月が過ぎ彼は名作「地獄の季節」を書きあげる。ここでその数行を記すことには何の意味もないが、素通りもできない。

時として、おれは空に、喜び勇む白色民族に覆われた、果てしない海辺を見る。頭上では一隻の金色の大船が、朝の微風に色とりどりの旗をひらめかす。俺はあらゆる祭りを、あらゆる勝利を、あらゆる劇を想像した。新しい花を、新しい星々を新しい肉体を、新しい言語を発明しようと思ひもした。おれは超自然の力を手に入れたと信じた。ところが、なんと！ おれは今おれの想像力と数々の思い出を葬らねばならない！ 芸術家の、また語り手の素晴らしい栄光が消え去ったのだ！……

かつておれの記憶に間違いがなければ、おれの生活は宴であつた。あらゆる人の心が開かれ、酒という酒が溢れ流れていた。ある宵、おれは美を膝の上に座らせた。苦い奴だつた。そこでおれはそいつを傷つけた。おれは正義に対して武装した。……

おれは毒を一気に飲み干した。もたらされた忠告には感謝感激だ、はらわたが焼け焦げる。毒の激しさが手足を縛り、

この身を変形させ、地上に打倒す。喉が渴いて死にそうだ。息が詰まる。叫ぶことも出来ぬ。これぞ地獄だ。永遠の刑罰だ。見ろ、勢いを盛り返した炎がなんと激しく立ち上ることか。おれはゆうゆうと焼け焦げる。そうではないか、悪魔よ！

「白痴のおぞましい高笑い」をもたらした春から、「もう秋か、それにしても何故永遠を……」を経て、「おれは冬を憎む。なぜならそれは慰安の季節だからだ」によつて一季節が終わる、地獄の旅である。

暁が来たら俺たちは忍辱の鎧を着て光り輝く街に入るのだ
解説者は言う。「この作品は原理に基づいて思考が展開されるとか発展する結論ではない。あえぎ喘ぎの独白であり、矛盾、撞着のぶつかり合う渦の中で、作者の本能と好みと繰り返して問い直され、とめどなく繰り返される。つまり、悪と無垢のいずれにも心惹かれ、神への渴望と憎悪に引き裂かれ……」。

母親のヴィタリー、兄のフレデリック、妹のヴィタリー、イザベル、みんな農作業に忙しい。だがアルチュールは知らぬ顔だ。夕方家族が疲れ切つて夕食をとる時、熱に浮かされた彼が戻つて来る。非難の目つきにあつても黙りこくつたままだ。「全百姓もげがらわしい、ペンを持つ手も鋏を持つ手

も同じか、おれは断じて手など持つものか・…」などとのたまう。それでも彼が一番かわいがっていた妹のヴィタリーは日記に記している。

「アルチュール兄さんは、何も手伝わない。それでも大事な仕事があるんだもの」

一季節をかけて地獄を一回りしてきたはずだったが、地獄は忍び寄るその影をわずかに見せただけだった。心の奥底から噴出してくるあらゆるものを紙にぶつけてしまつて、彼はしばらくは気の抜けた日々にいた。



現在のロッシュ村

二千九年、僕は初めてロッシュ村を訪れた。シャルルピルのランボーの足跡を一応見尽くしてからだった。パリとシャルルピルの間にルテルという駅がある。シャンパーニュの中心のランスの近くだ。支線の乗換駅で小さな町だった。地図で探してそこが一番ロッシュ村に近いだろうと見当をつけた。

人影もあまり見えない街角に、観光案内の事務所がある。ヴェルレーヌ記念館があると聞いた。そこにも興味はあったが、まずロッシュ村だ。無理だとわかつていたが案内の女性にロッシュ村までのバスの時間を聞いた。予想どおり一日に数便あるだけでその日には帰れない。つぎはタクシード。何万円かかるかわからないが、十万円を越えることはないだろう。例え越えたとしても、ここであきらめるわけにはいかない。当然電話をした。

通りで待っていると、トラックのような中型車をおぼちゃんぐが運転してきた。明るいおぼちゃんぐで、ヴェルレーヌやランボーは不良だったから地元の人にはあんまり人気はないよ、ついでにヴェルレーヌ記念館の前を通ろう、とまくし立てる。広い平野というか丘陵地帯、の畑を車は走る。はるか彼方は雲に覆われている。

記念館は休みだった。ヴェルレーヌはブリュッセル事件のあと刑務所を経て改心し、敬虔な信者になった後、教職に就いた。そしてリュシアン・ルチノアという少年と農業に従事する。その辺りの畑を買って彼に与える。その隅の小ぢんまりとした家が記念館になつている。

少年は美少年で、三十半ばのヴェルレーヌの恋人として日々を送っている。

しかし先日、ヴェルレーヌの専門の若い教師、九州大学の倉竹先生にそのことを聞くと、いや純粹に養子のような扱いで決して同性愛の結びつきはなかった、と教えてくれたが、僕はその説は信じたくない。

何枚か写真撮ってそこはそれで終わり。

いよいよロッシュ村だ。いままで白黒写真でみた暗く古い農家の納屋や牛小屋や穀物倉庫が眼に浮かぶ。彼の怒りに燃えたぎっている鋭い青い眼が光る。苦悩と恥辱に絶えて沈黙に沈む顔が見える。虚無の深淵に向かって雄叫びを上げ髪をふり乱している少年。さあ着いたと、おばさん。

何もない。ただの田舎の舗装された三叉路。小さな木立の先はただだっ広い畑が広がっている。ランボーハウスと書かれた古家があるがこれは偽物に違いない。荒れ果てた雑草にまみれて、二本の金属のモニュメントが立っている。「ここでアルチュール・ランボーが地獄の季節を書いた」と彫つてあるだけ。車も通らない、風が吹き過ぎるだけだ。



ロッシュ村にある
地獄の季節のモニュメント
「ランボーがここで地獄の季節を書いた」と刻まれている

さあ、アルチュールよ、君に会いに来たぜ。君と握手をして抱きしめるために来たぜ。ここは、地獄の始まりの場所でもあり、終りの場所である。母親の里であり、ある時は少年アルチュールの懐かしい遊び場所でもあったはずだ。長い放

浪と虚無の闇を彷徨って片脚になって戻って来た場所でもある。そして地獄の扉を開き、絶望のうちに扉を閉めに帰って来た場所だった。崩れてしまった土塀が残っている。これらは当時の物だろうか。ナチスの攻撃によってこのあたりも爆撃で破壊され尽くされた。

何もない。風が吹き抜けるが静寂を壊すことはない。僕は立ち尽くす。木立の蔭から誰かが僕を見ている。急に懐かしさが込み上げてきて僕は振り返る。だが、ただ雑草が揺れているだけ。君と同じ空気を吸い地面に足を付けただけで、君の気持ちかわかるのはおそらく僕だけだろうという。

近くに小さな池があった。洗濯池と書いてある。昔の人はこんな池で洗濯をしていたのだ。睡蓮が浮かんでいる。ここでアルチュールは何時間も座って瞑想にふけていたとおばさんが説明してくれる。浮かんだ睡蓮を、「水薔薇」と名付け、水に映つた空を見ながら異国を思っていたのか、すでに地獄を見つめていたのか。そして空虚も。

「十六」出版とその後

吐き出し叩きつけ激情の限りを尽くすと、半分はもう興味はなくなっていた。かろうじて昔知っていたベルギーの印刷屋に五百部を刷ってもらい十二部だけを手元にもらう。刑務所のヴェルレーヌや何人かの友人に届ける。出来上がった本自体には彼は満足していた。その評判を気にしていた。嬉し

そうにしていたと誰かが書いている。

彼は再びパリに姿を現す。まずカルチエラタンのカフェ・タブレだ。だがブリュッセル事件を噂している友人たちは誰もが気味悪がり怖がって近寄ってこない。冷笑と無視を浴び彼は黙って腰を下ろしているだけだ。「蒼ざめた若者は、その目付きが見る者の魂を震撼させるほど、悲しげだったので、生涯忘れることが出来ないほどだった」とある人が書いている。彼は沈黙に閉じ籠ってしまふ。パリはもううんざりだ、文学とは、詩とは何か、もう興味はない、一瞬でも彼はそう思ったに違いない。

ただ、ジェルマン・ヌーボーという若い詩人がただ一人、かれはヴェルレーヌを崇拜していた、アルチュールに声をかける。アルチュールは、もう詩なんてどうでもいい、どこか未知の土地へ旅してみたい、というジェルマンが、じゃあ僕もつれて行ってくれませんか、と返事する。

印刷屋に残した「地獄の季節」の残り四百八十冊あまりはその後支払いがないまま、千九百一年まで倉庫に三十年近く眠り続けることになる。そして千九百十一年、ある愛書家が只同然でそれを手に入れる。

ロッシュユ村へ帰った彼は手持ちの原稿や手紙を大きな暖炉に投げ込む。母親は彼の改心を喜ぶ。もう馬鹿な真似はしないだろう。妹たちは真剣な兄の顔が炎に照らされて揺らぐのを美しいと思ってみている。ただ、書き溜めていた「イルミ

ナシオン」のもとになる原稿だけは焼くことはできなかった。

僕の「ロッシュユ村幻影」という小説に次の行がある。「アルチュールは書きなぐった原稿を燃やす。激しく燃え上がる焔から彼は眼を離さない。おれは本当の「見者」になつた。地獄の季節をのたうちながら徘徊して戻つて来た。そして立ち上がった。だが詩は地獄を征服したか。真の「見者」とは。詩を書く自分に何の意味があるのか。揺らぐ焔がそう感じさせるのか。焔に纏いつかれ身をよじる自分が見える。頭髮が燃え上がる。苦痛に苛まれてじつと耐えている己が見える。救いを求めているのか。焔はおれを焼き尽くさない。生殺しのようにいつまでも止まらない。」



「地獄の季節」
の初版の表紙

千八百七十四年の春、二人はロンドンに着く。もうすぐ二十歳になろうとするアルチュールはもう大人である。二年前にヴェルレーヌと海を渡った時とは違う。今は英語を勉強する時だ。いずれドイツ語も勉強しなければならぬ。職も探さねばならない。

しかし文学への希望がすこしずつ息を吹き返そうとする。ジェルマン・ヌーボーは作品をパリへ送り、アルチュールも何かうずうずして来る。手元に残していた「イルミナシオン」の原稿を清書したりする。だが突然、ヌーボーは黙ってアルチュールの下を去る。お前がランボーのところにいると、いずれ同じように文学の道を閉ざされ、誰もがお前を見限るぞ。誰かのきつい言葉がヌーボーを決心させたようだ。アルチュールは再び一人になる。

彼は冷静に職を探しながらそこにとどまる。しかし次第に淋しくなり母親をロンドンに呼ぶ。母親と上の妹ヴィタリーがやってくる。

この妹のヴィタリーはやはりアルチュールに似て文才がある。十六歳だった。ずっと日記をつけている。このおかげで家庭内のことなど随分とアルチュールの人柄も知ることが出来る。また彼がどれほどこの妹を可愛がっていたかも知ることが出来る。

彼女はロンドンの大きさに興奮する。通日も駅も教会もどれも立派だ、立派だ、と連発する。大英博物館も見学する。街中の美しい店を見て回り、レースの綺麗な服を買いたいと思うが、母親が許してくれないのが分かつている。暑い夏の

公園でアイスクリームを食べる。何と美味しいことだろう。

だが、その年の猛暑が女性二人を苦しめる。ヴィタリーはシャルルビルが恋しくなる。兄はまだ職が決まらない。二人はとうとう帰ってしまう。二十七日間の滞在だった。ヴィタリーは日記に書く。

「三十一日にお兄様と別れた。お兄様は悲しそうだった。」
「私はアルチュール兄様のこと、兄様の悲しみのことを思う。ママのことを考える。ママは泣きながら手紙を書いている」
その年の暮れ、クリスマスには間に合わなかったが、久しぶりにアルチュールがシャルルビルに戻り一家で楽しい正月を迎える。

ロンドンを離れスコットランドなど転々とするが英語をほとんどマスターした彼にもう英国は必要ない。またその時、徴兵の召集令状が届く。だが兄のフレデリックが五年の兵役を志願しているのでかろうじて免除される。つぎはドイツだ。かれはシュツットガルトへ向かう。

長い間囚人生活をしていたヴェルレーヌが釈放されたのはその時期だった。彼は神秘体験をし敬虔な信徒になっている。アルチュールに会うためにシュツットガルトにやってくる。久しぶりの時間だ。ヴェルレーヌは神についてアルチュールに説くが相手にされない。酒が入ると二人はまた昔のように喧嘩を始める。懐かしい喧嘩だったが、それ以上は何の発展もない。

「イルミナシオン」の原稿をヴェルレーヌに預けジェルマン

・ヌーボーに渡しどこかに発表するように依頼する。それは幾人かの手を経て十二年後、千八百八十六年にやっと目の目を見る。その時武器商人としてアフリカの闇に蹲っていたアルチュール・ランボーの知らないことであつた。勿論、誰もがアルチュール・ランボーそれは誰だ、と言つていたことだらう。

冬が去ると、彼の放浪癖が覗き始める。アルプスを越えイタリヤに入るがミラノで病気で倒れる。その後南へ向かうが疲れ果て、フランスへ送還される。マルセイユに渡りスペインの軍隊に志願するが結局その夏パリに戻る。

「十七」終わりの始まり

それが本当の地獄の始まりだつた。地獄とは怒りを噴き上げらせるところではない。怒りは噴き上げらせばあるいは忘れることもできる。また我慢すればいいだけだ。だが悲しみは忘れることが出来ない。時間とともに深くなつていくばかりだ。それが地獄なのだ。そのどん底に陥つてしまふともう抜け出すことはできない。悲しみを捨て去るには己の肉体と精神をも一緒に捨て去るしかない。

千八百七十五年七月に一家は、兵役中の兄のフレデリックを除いてパリに滞在する。体調を壊していた上の妹のヴィタリーの診察と治療を専門家に仰ぐためだつた。検査の結果を

待ち今後の療養生活の指示を貰うために滞在は長くなつてた。

パリに出かける前日の日記にヴィタリーは書いている。そこで日記は終わつてゐる。この日記はシャルルビルのミュゼランボーにある。

「七月十三日 明日パリに行く。嬉しい。心が踊る。去年はイギリスの首都にいた。お兄さんのおかげだつた。今年はパリだ。今は夜の八時。明朝四時に出発する。様々な思い、そう、本当にさまざまな思いが胸に迫る……」

ここからは僕の小説「ロツシユ村幻影」を引用する。詳しい資料はない。僕の想像の中にアルチュールと一家の現実がある。

「何日も待たされ何日も診察と検査。病名がわかるまで長い時間だつた。昨年はロンドン、今年パリとはしゃいでいたヴィタリーも長い待機に嫌気がさし始めていた。ある夕方、ホテルの部屋でヴィタリーはシャルルビルへ帰りたいと駄々をこねて泣いていた。叱りつける母親の前で妹のイザベルも泣いていた。ヴィタリーは、ねえアルチュール兄さん、お願い帰りましょう、シャルルビルへ、と彼の腕にすがつてきた。アルチュールも悲しかった。ヴィタリーはまだ知らなかつたが、その病気はほぼ治る見込みはないとの事だつた。命は来年の春までもわからない、と医者と言つた。それでも少しの望みをかけて治療方法の指示を待つばかりだつた。

よし、みんなでパリ見学へ行こう。馬車を呼ぶ。少しは暑いが走れば涼しい。

アルチユールの提案にみんなあつげにとられたが逆らわなかった。昨年の夏ロンドンで機嫌の悪かったヴィタリーがアイスクリームを食べて喜んだことがあつた。あの時の嬉しそうな顔をまた見せてくれ。みんな疲れて黙りこくっていた。馬車はパリの夜を走った。ガス灯に浮かんで美しい建物が次々に後ろへ走つていった。走れ、パリの夜を。アルチユールは一人心の中で叫んでいた。見るんだ、パリの灯を闇を。セーヌの輝きを、沢山の人間が傷ついて死んでいったパリだ。パリ自身も傷つき、そして傷つくたびに美しくなつていくパリだ。おれの愛したパリ、そしておれを裏切つたパリ。彼は心の中で泣いていた。パリよ、ヴィタリーを救つてくれ。おれの心を捧げたパリよ。そして最後のパリよ。」

資料によると、その後はヴェルレーヌとの決別や、ピアノの練習や、気が狂つたような外国語の勉強に日々を費やしたとある。英語ドイツ語はもう済んでいた。ロシア語、アラブ語、アムハラ語、ヒンドスタニア語、と記録されている。

そしてその時が来た。詩とは何か。文学になんの意味があるのか。彼は初めてそのことを己に問うた。いや問う前には問さず捨てた。何の意味もない。悲しみ、苦悶を抱えて生きる事、その中に生きることの平穏さを気づかぬうちでもない、自然に身に着けることだ。この己の日々がどんな詩よりも激しい詩であるのだ。かつて彼が切り開いた俗世間の先に輝いていた光は、闇に変貌した。残酷な美しい真実の闇だつ

た。

再び「ロツシュ村幻影」に戻る。

「その秋からずつとヴィタリーはシャルルビルの家で床に就いていた。全身の骨が息をする度に壊れていくようだと言つていた頃はまだよかつた。今は身体の得体の知れない緩い痛みが、その起こつて来る奥底へ体全体を引き込もうとしている、と彼女は言つた。それは物理的な痛みでもあつたが、恐怖の痛みでもあつた。艶やかだつた栗色の髪は抜け落ちナイトキャップから僅かにはみ出している。頬と唇は痩せて土塊のようだつた。ただアルチユールに似ている青い瞳だけが不安の余りさらに美しくなつていた。彼は家族の中で彼女が一番好きだつた。ヴィタリーもそうだつた。……」

「十二月に入ると雨と霰の日々が続いた。マドレーヌ河畔の家でアルチユールは何日も部屋に閉じ籠つていた。何も考えることはできず頭は空白のままだつた。かつてはこの部屋でどれほどの沢山の詩を書いたことだろう。記憶はあるがその時の感情のきらめきや高ぶりや、頭の緊張や快さは全く思い出せない。

雨が止んで陽射しが差し込んできた日、彼はヴィタリーの部屋に入った。彼女は窓辺に立つて外を見ていた。道を挟んでムーズ川が流れている。すっかり落葉してしまつている森の木々は僅かの陽に映えていた。空の青がムーズ川の流れにきらめいている。駄目だよ風邪をひくよ、と彼は彼女の手を取つて座らせた。窓を閉めてもまだ外を見ている。

(だけど今日は本当にきれいですもの、ムーズ川が。この

まあお日様がいてくれたらいいのに。今年のクリスマスはミサには行けるかしら。）

もう何年も教会へ足を向けたことはない。しかしヴィタリーの具合がよければその時は自分が抱いてでもミサに行こう。昔はよくヴィタリーを抱きあげたものだった。冬の寒い朝、よちよち歩き of 彼女は寝巻のまま俺のベッドに飛び込んできたものだった。そして俺に抱かれるのが好きだった。暖めてやるとまた眠った。アルにいちゃん、アルにいちゃん、とまめらない口で何度もおれを呼んだ。

（去年はアルチュール兄さんのおかげでロンドンにもパリにも行ったし、大きな教会の礼拝も出来たし。ロンドンは素敵だったわ、駅はシャルビル of 何倍も大きくて百貨店のシヨウインドウは綺麗だった。何も買えなかったけれど、本当は欲しいものが沢山あったの、お母さんから叱られるから何も言いだせなかったけど。町の人はみんなおしゃれで。地下鉄も面白かった。あの時、疲れて帰りたいと、と駄々をこねたけど、今はもう一度行きたいわ。今度はあの綺麗なお洒を買いたいわ。夏は暑かったけど、あの時公園で食べたアイスクリームは美味しかった。もう一度食べたいわ。初めて見た海は綺麗だった。あんなに大きくて静かで晴れやかでいきなり世界中が蔷薇色に燃え上がるような夜明けも。アルチュール兄さんに騙されていたわ。海はムーズ川を大きくしたものの、先は見えないけれど、ずっと流れていて夜も昼も沢山の花が次から次に流れていると言ったでしょう。）

翌日からヴィタリーは熱を出した。一週間も熱にうなされ

て死んだ。人形のような小さな美しい死化粧だった。組み合わせられた指は蠟燭のように細く白く冷たかった。アルチュールの慟哭は止まなかった。

アルチュール二十一歳、ヴィタリー十八歳と六ヶ月だった。

一家が住んでいたランボー河畔のアパルトマンにはいくつかの部屋が展示されている。資料などは前にあるミュゼランポーに展示されている。受付の女性に、どれが「酔いどれ船」を書いたアルチュールの部屋で、どれがヴィタリーが亡くなった部屋ですかと訊ねたが、わかりませんという冷たい答えがかえってきただけだった。

「続く」



ランボーの住んだ家
この2階の部屋で最愛の
妹ヴィタリーが死んだ